連載 観光まちづくり最前線 No.14 地域を歩くレポート

マイナスイメージをプラスに捉えるまちづくり～「あついぞ！熊谷」の新たな展開

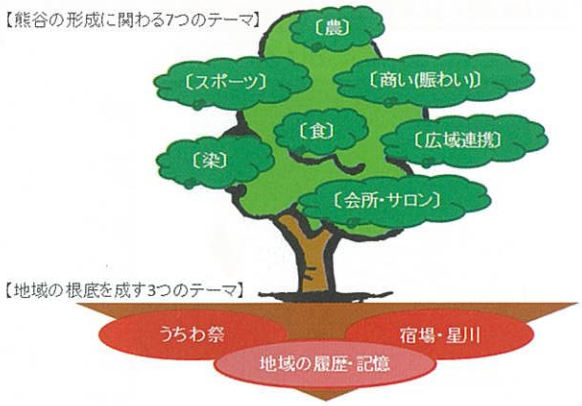
帝京大学　経済学部　観光経営学科　大下ゼミ

毎年のように報道される異常気象。夏になると気温の上昇とともに館林の知名度が上がってきます。今回は、元祖暑いまち・熊谷の取組みをレポートします。

■元祖暑い町・熊谷

埼玉県熊谷市は、都心から約60km圏に位置する人口約20万人の中核都市です。江戸時代には旧中山道の宿場町として発展し、現在でも交通の要衝になっています。「ヒートアイランド現象*」や「フェーン現象**」等により、毎夏のように全国１、２位を争う暑さを記録しており「元祖暑いまち」として知られています。

昨年度、第３セクター「株式会社まちづくり熊谷」が行った「熊谷市観光まちづくり基本プラン基礎調査」の中で「熊谷の10のテーマ」が示されました。『地域の履歴・記憶』『うちわ祭』『宿場・星川』が地域の原点であり、これらを根底として『農』『染』『商い（賑わい）』『スポーツ』『食』『広域連携』『会所・サロン』の７テーマが枝葉となって育っていることがイメージされたものと理解できます。枝葉が張っていることで、木陰が地域に涼を生み出していることでしょう!!



■暑いまちサミット

今年７月９日(日)には、「第４回 暑いまちサミット」が開催され、大下ゼミからも先輩が１名参加してきました。同サミットは、日本の歴代最高気温を記録した４都市(熊谷市・多治見市・四万十市・山形市)が一堂に会し、2013年より開催されています。今年は「暑さを楽しむ方法」についてワークショップ形式で話し合われました。発案された暑さ対策は、一斉に８月中旬に取り組まれる予定です。

最優秀アイデア「ゆるキャラでクールビズ」「クールスポット探検」は各地で実現！

クールシェアスポットでは涼を感じる様々な工夫が。青いのぼりも涼しげ～

■暑さをプラスに捉えたまちづくりの展開

市では、夏の「暑さ」を逆手に、人の「熱さ」と合わせて積極的に活かそうと2005年より「あついぞ！熊谷 熊谷新時代まちづくり事業」に取り組み、かき氷「雪くま」などを生みだしました。昨年度からは、観光等への影響を懸念する市民の声を受け、市では「あついぞ！熊谷」の使用を中止したものの、「暑いまちサミット」をはじめ、涼しい場所を共有する「クールシェア」など、官民あげて「暑さ対策日本一」を目指した事業がますます活発になっています。

クライマックス「曳き合せ叩合い」は12基の山車・屋台が集結の大迫力！

■情熱、パッションをテーマにしたまちづくりへの期待

先日、７月22日(土)に「熊谷うちわ祭」の最終日に参加し、熊谷の「暑さ」と、地元の人の「情熱」を肌で感じてきました。また、町中(まちじゅう)にラグビーチームのバナー(旗)が見られるなど、アジア初開催となる「第９回ラグビーワールドカップ2019」開催都市としての盛り上がりも垣間見えました。

熊谷の根幹を成す「祭」と「スポーツ」どちらにも通じる、この『情熱(passion)』を活かした、熊谷の今後の「あつい！」まちづくりに注目していきたいです。

［執筆者］　加藤永理奈・上田裕樹(帝京ゼミ)・岩田洋和(立教ゼミOB)

*「ヒートアイランド現象」･･･南よりの風が都心部の熱でさらに温められ吹いてくる現象

**「フェーン現象」…熊谷市の場合は、上空の西風が秩父の山を越え下りる際、風下で気温が上がる現象